

文化財 やまと

大和町文化財保護協会発行



七鈴五獣鏡

文化・文化財雑感

会長 森 藤 幸

「文化財やまと」の原稿を書かなければ……と、半ば強迫観念におそわれているときフト思い浮んだことがある。それは昭和五十一年の大和村時代、村民憲章制定委員会の或る日の会議のことである。会議の冒頭某委員から、「文化とは何ぞや?」という質疑が出された。

大和町民憲章は、「文化の高い町づくり」を第一に掲げ、「志を高く持つ町づくり」というような極めて格調の高いものだけに、一字一句もゆるがせにしない姿勢で作業が進められていたので、「文化」という言葉も誰もが云い古されて当たり前という言葉にして簡単に使っているが、果たして各委員もその意義を明確に把握しているかという極めて真剣な根本的な発言であった。その時の会議の状況は記録もないしまた内容の記憶も

ないが、真剣勝負のような緊張した空気があったことは覚えておかしきことにその討論の結果については何も記憶していない。文化とはどういふことか? 分かったようでこれを定義的にいい表わそうとするとむづかしい。文化とは文明開化のことであり、文明開化とは世の中が開けて生活が便利になることといふ古されたように割り切ってしまう簡単だがもう少し深く入って見よう。それにはいつものクセで手取早く手近の辞書を頼って見ることにする。大正時代の「漢和辞典」には「学術・教育の盛んなさま」とあり、「三省堂の「漢和辞典」には「(一) 学問・芸術・法律・経済などが進歩して文明の世となること。(二) 世の中の開け進むこと。(三) 武力や刑罰を用いない教化。(四) 文治教化。」と出ており、小学館の「国語大辞

典」には「(1) 権力や刑罰を用いないで導き教えること。文徳により教化すること。(2) 世の中が開け進んで生活内容が高まること。文明開化。(3) 自然に対して学問・芸術・道徳・宗教など人間の精神のほたらきによってつくり出され、人間生活を高めて行く上の新しい価値を生み出して行くもの。(4) (他の語の上について) 便利である、ハイカラ・モダンである、新式であるの意を表わす語。文化かまど、文化住宅など。(略)」とある。「広辞苑」を開いて見ると「(1) 文徳で民を教化すること。(2) 世の中が開けて生活が便利になること、文明開化。(3) 人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果、衣・食・住を初め技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む。文明とはぼ同義に用いられることが多いが、ドイツでは人間の精神的内面的な生活にかかわるものを文化と呼び文明と区別することがある」と出ているし、平凡社の「大百科辞典」には「日本語の文化という語は世の中が開けて生活水準が高まっている状態や、人類の理想を実現していく精神の活動を意味する場合

と、弥生文化というような生活様式を総称する場合がある。社会科学の諸分野では第二の意味で文化という概念を使用するのが普通であるが、この意味における文化についても定義は多様であり時代的な変化も見られる(下略)」とある。辞書としての性質上要約されているので分かりにくい点もあるが、これらを対照し総合して見れば、おぼろげながら概念をつかむことが出来るような気がする。地球に人類が誕生し、日本にも人間が住みつくようになると、そこにそれぞれ文化が発生し変化し発達して来たことは歴史が教える通りである。文化は異質の文化に出合った時に初めて自己を意識する。そしてこのような出会いを繰り返すことによって自分自身を鍛え、発展させ、より豊かに成長して行くものであるという。文化は多様なものであり、その多様な文化が共存し競争することによって人類に明るい未来が開かれて行くのである。

日本の文化は、弥生原始稲作文化を始めとして、その時代時代を特色ある花を咲かせながら発展を遂げて来た。近代においては明治

維新の際西歐文化を採り入れこの波は明治十年ごろ鹿鳴館時代まで続き文化という言葉も「文明開化」といわれるようになった。「散切り頭をたたいて見れば、文明開化の音がする」と狂歌に歌われたものである。その次は太正末年の「文化生活」である。「文化生活」が万人の夢であり、赤レンガのさやかな住宅は「文化住宅」であり、月給取りが文化的であこがれの的になり文化カミソリ・文化センチ・文化鍋まで現われるという始末であった。

「文化財」である（広辞苑）ことはいうまでもない。文化財は、わが国の歴史・文化の正しい理解のため欠くことのできないまた、将来の文化の向上発展の基礎をなすものである（百科辞典）。優れた文化を創造するためには先人の遺産である優れた文化を保護し充実にさせ継承して行かなければならぬことは当然のことであり、文化財についても全く同じことがいわれるのである。

最近各地で日本古代の歴史を解明する貴重な出土品があり、文化財に対する一般の関心を一段と高めている。また社会状況や経済状況によって各種の開発事業も盛んに進められるようになった。そこで文化財保護と開発事業の競合ということが起り、何れを優先させるか各地で問題が起きている。このことは日本人の文化・文化財に対する度を量るバロメーターとして重要な課題であると思う。

こうした文化活動によって客観的に生み出された様々な事柄や色々の物で文化価値のあるものが

生きていた珍木

田代の葉成りイチヨウ

日置 繁

昨年六月九日、日本植物保護推進会議会長で且つ岡山県自然愛護協会会長三宅一喜先生が、岐阜県のうち飛騨及び郡上地区の天然記念物の現状を調査に来られた。

私は若い頃この木の下を通過して山仕事に行った昔を思い出していました。その木は大間見の田代にあるのです。先生は今から行きたいと意欲を燃やされましたが、何せ薄暮に近く、美並村泊りであり断念してもらい結局私がその調査を代行することを約しました。

その夜は所有者の田代秋穂さんに連絡し現況をお聞きしたところ、あの木はもう十年余り前に豪雪と台風にひどく枝が折れてしまい余り無残になったのでやむなく伐りました。何面か基盤になったよう

です。然しその木の根生えがもう大分大きくなったがまだ実は拾ったことはありません、とのことでは私は驚き且つ落胆し、この旨を早速宿の先生に電話しました。

最後の調査地口神路白山神社の六本松の調査を了え拝殿の横の大公孫樹の根に佇んで、話題が、珍木葉成りイチヨウにおよび、先生曰くこの珍木は全く数が少なく日本全国で今知られているものは三八本に過ぎず全部を調査した。と

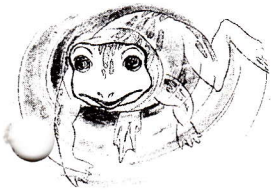
豪雨で荒れた田代道の復旧があり、かつ結実の確認できるようになった十月五日、町教育委員会が所有者の前記田代さん案内のもとに現況調査をすることになり、私もその一人に加わりました。元来「葉成りイチヨウ」は、突然変異で普通の実に混って葉の先に直接可憐な実を着けるもので年によってその豊凶もあるようである。

この木は若い頃この木の下を通過して山仕事に行った昔を思い出していました。その木は大間見の田代にあるのです。先生は今から行きたいと意欲を燃やされましたが、何せ薄暮に近く、美並村泊りであり断念してもらい結局私がその調査を代行することを約しました。

その夜は所有者の田代秋穂さんに連絡し現況をお聞きしたところ、あの木はもう十年余り前に豪雪と台風にひどく枝が折れてしまい余り無残になったのでやむなく伐りました。何面か基盤になったよう

です。然しその木の根生えがもう大分大きくなったがまだ実は拾ったことはありません、とのことでは私は驚き且つ落胆し、この旨を早速宿の先生に電話しました。

正しく葉成りイチヨウの萌芽の成長したもので分身であることは確かで遺伝子は変っていないはずである。樹高十五米目通り周囲九



一種最大枝張り東西七、七米推定樹齡三十年伐採時既に大分成長していたために世代交代がまことにスムーズという外はない。

さて期待の結実の確認である。元来イチヨウの結果年齢は高く、最低でも十八年ぐらいというのである。樹下から仰いでも見えるものは葉ばかりである。幸い用意して行ったロープをかけて樹上に登った。東方に伸びた力枝に辛うじて三個の果実を認めて採取した。うち一個は小さく不全なものであったが遂に葉成りイチヨウの発見には至らなかった。

今までに確認されていなかった後継木の結実は少ないながらも確認せられたのである。結実の後れた原因は竹林の中で受光が不足し、かつ枝打ちによって枝が若いためと考察されたので近く竹林の除伐等を行ない結実の促進をはかることとなった。

イチヨウは若木は一般に葉は大きくまん中の切れ込みが深いのであるがこの後継木は、これに反して葉は小さく切れ込みが浅い。

本年も引き続き結実の追究をして町の珍木としても、日本稀有の葉成りイチヨウの名乗りを上げたい

ものである。

また、この木にまつわる口伝として田代家の仏法信者の極楽詣りの証としてこの木に不思議をもたれたものと伝えられ、かつては法縁とのつながり深く、この実を拾って置き法事の引き物に添えたものであると田代さんは説明するのである。

因みにイチヨウは、中国の原産であり東洋の特産で一目一科である。日本では神社仏閣にはよく植えられる。近年は街路樹・公園・学園に

も利用せられているが厚い葉は

火樹としてその効用が知られている。植物分類では、広い葉をもちながら葉脈が通直であるので針葉樹に列すること、（葉）と同様であり、古木になると枝下（腋下）のあたりにから「イチヨウの乳」なる最大な気根を生ずることや、自から運動する精子を飛散させることは、蘇鉄と共に樹木中奇異の種である。秋の黄葉を賞する外、茶碗蒸しにはなくてはならぬ銀杏の実は、他のものでは代え難い風味をもつ愛すべき樹でもある。



葉成りイチヨウの後継木（萌芽）

保存修理された東氏館跡庭園

土松新逸

国指定名勝となった東氏館跡庭園は、昨年保存修理事業が実施されて、すばらしい庭園になりました。発見から発掘調査にお手伝いして来たものとしてまことに感深いものがあります。修理工事が実施される前は、一部の遺構が耕作などのために動かされたところもあり一見雑然とした感じもあったが、今回の保存修理工事ですっかり整備されました。池の部分や水路など重要な石列のほかは土が覆われて芝が張りつけられ庭園風に変わって来ましたが、何より感動したのは、池へ注ぐ水の通路が極めて趣きのある流れをしていることとであります。庭園東南方の湧水を利用して池へ導入してある水路が途中で二つにわかれ、一方は直接池へ向かい、一方は屋敷の周囲を回って来て池へ注ぐ手前で直接池へ注ぐの流れとなつて、これらの水路は発掘したときのそのままの姿で、自然に分かれて流れるようになっており、分かれる所の水路の中の石も発掘したときのそのままであるところなど、よく出来ているのに感心したことでした。水を流してみるまでは水路の中に護岸でない石が横たわっているのが何のためにあるのかわからなかったのですが、途中溝が広くなり護岸の石がない所なども水を流してみてもではその趣きがわかりませんでした。そしてここへ注ぐ水は東南部で湧き出る溝水で充分の水量があるようで、濁りのないきれいな水が池を流れるようになっております。

また、庭園の西南部の洗場の様などところへ注ぐ溝は曲水をなしており、これも大変趣きのあるものと思われまふ。ここは現在湧水だけでは水量が充分でないようですが、往時にはしのわき山から流れ

る水で充分水量があつたのだと思われます。
すもも・やまぶきなどが植え付けられ、東部にもすもも・やまぶきが植え付けられ、もう花をつけているものもあり、いずれもすっかり整備されて庭園らしくなりました。

右水路の整備のほかに庭園の全体に芝が張られ、西南部には山桜

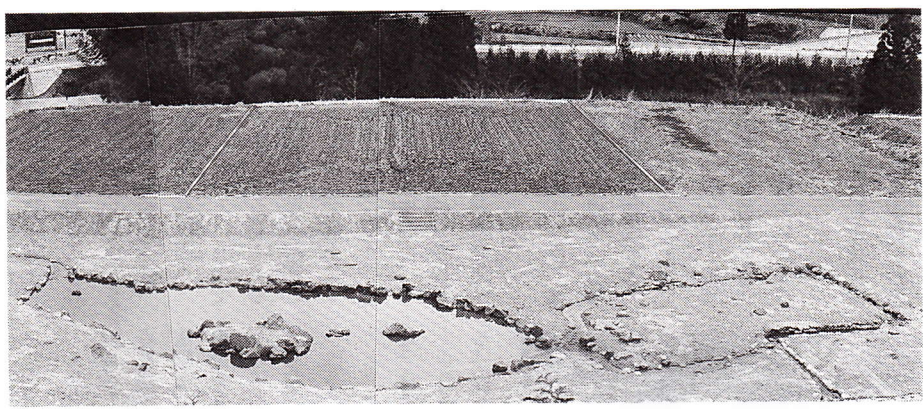
中世武将の館跡庭園で国の名勝として指定されたのは全国で三例しかないとのこと聞きますと、なるほどと

しめじみ感じさせられます。まことに東常縁公が連歌師宗祇に古今伝授したところらしい尊い遺跡であることを改めて深く感じるものであります。

よみがえる中世の「夢の跡」と町公報四月号の表紙に出されたのを拝見して、うまく表現してあるなあと思いました。

保存修理成りし東氏館跡庭園の石に春陽あまねし

並ぶ石向き向きに春の日にひかり遠き歴史を語りかくるも



東氏館跡庭園（南より）

常縁公宗祇とここにおわすがに池に映れるしのわきの山

常縁から宗祇あてに送られた書状の一節（『五』）に「このほど当郡の山中に庵室を構え候て、

はばかりながら小倉山荘になぞらえ老の遊み所とせばやのあらましに候」とあり、その庭園がこれではないかともいわれております。現在小倉山荘跡がはっきりしませんのでたずねることもできませんが、あるいはこのような趣きのある構えであつたかと想像し、一層この庭園跡が貴重なものと思われます。

殿様の休まれた一位の木と 妙見宮に奉納された櫛

加藤 一 男

殿様の休まれた一位の木

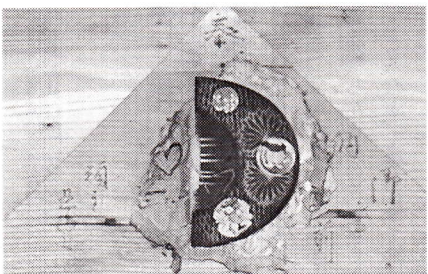


大和町牧字清水廻りに、嘉永六年七月郡上藩主青山幸哉が妙見宮へ参詣の折、木陰で休まれたと伝えられる一位の木（所有者清水定さん）がある。当時は、ここが栗巢街道であり、字名の如くきれいな清水がいたる処に出ており、当然清水も飲まれたことであろう。ひとかかえもある大木であったが、明治十三年の火災により幹は次第に枯れてゆき、現広残るのはその一つの枝であると伝えられる。

妙見宮に

奉納した櫛

妙見宮神官栗原豊後が書いた萬留帳（大和町史史料編一二九頁）に、嘉永五年十一月津保之保鳥屋市組田畑（現在の武儀郡上之保村）の長兵衛内くと申す者が、櫛一枚に金子十六文を添えて妙見宮に奉納した事が載っている。その櫛と思われるものが明建神社の拝殿に奉納してある。つげの櫛で、見事な花鳥の模様が入っている。三角形の背板に奉納、御宝前、願主丑年女と書かれている。



奉納された櫛

平成元年一月二七日～二九日 山展示されている。殊に感心した大和町文化財審議会のメンバー七人と教育課の酒井係長、車の運転は寛政之助氏総勢九名で東氏出生

の地、千葉県香取郡東庄町に同町からの招待を受けて、まだ真つ暗の朝五時に出発した。和良・加子母村經由で中津川ICから中央高

東庄町訪問の旅

有代信吾

午後六時からの歓迎会には五十嵐章夫町長・斎藤繁教育長・石毛豊郷土史研究会会長をはじめ町会議員・郷土史研究会の方々、及び町の有力者名士の方二三名がご出席下さって盛大に催してくださる。五十嵐町長は東氏を通じての大和町との因縁、東庄町の紹介の後、末長い町をあげての付き合いを希望され丁寧な歓迎のお言葉をいただく。つづいてご出席の各位より丁寧な歓迎のご挨拶があり、当方より森藤会長が代表してお礼の言葉を申し上げた。

暮れなずむ道を東庄町の方の先導車に誘導されて東庄町に入る。すぐ公民館に案内されて資料室を見せていただく。東氏の資料が沢

○分出發で古跡・名勝を探訪した。そのあらましを次に記す。
東庄町（とうのしょうちよう）のあらまし。

利根川の水と緑のジュウタンを敷きつめたようなやすらぎのある町、総面積四五、〇三二キロ平方

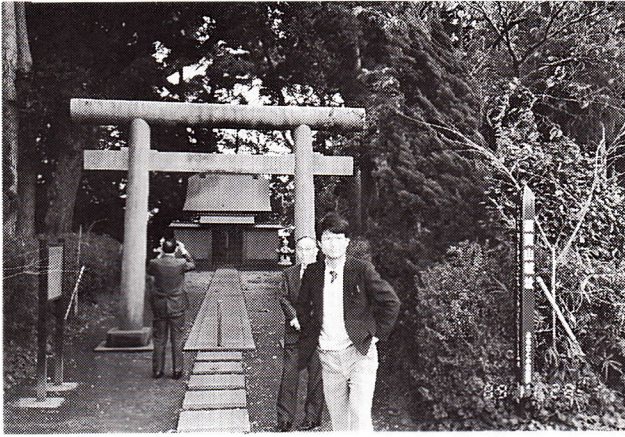
メートルの町である。東京都から約八〇km東にあって昭和三〇年に一町三か村が合併して町制が敷



東大社前にて

かれています。「東庄」の由来は鎌倉時代にこの地が東氏の荘園であったことによる。また農地は五二

高四五mの岡の上であり、約一〇平方m。岡の麓に外濠の跡があり、本丸・二の丸・三の丸・空濠・曲輪などの跡がある。かつての東氏の居城。
③須賀山城跡 東庄町須賀山にあり。大きな空濠の跡がある。此処の史跡標柱の側面に
『かたばかり残さん事もいざかかる うき身はなにをしきしまの道』
の東常縁の歌が書かれてある。この城も森山城の前に東氏の居城であった。
④芳泰寺 曹洞宗の寺で本尊十一面観音。東氏累代の香華寺である。境内の一隅に安貞二年（一二二八）に没したと伝えられる東胤頼と側室を弔うため造立された五輪塔があり、きれいな花が供えてあった。また本堂の本尊前に胤頼の戒名「通性院殿真岩常源大居士」の位牌が安置されている。
⑤東大社 第一二代景行天皇の創建と伝えられ、東庄町の総社である。目通り七m以上の神木が亭々とそびえ立ち、荘嚴の漲る境内である。全昇殿し、玉串奉奠参拝し、飯田真也宮司のお



須賀城跡

ら、郷土史研究会の皆さんが見送りに来て下さった。七二歳のご高齢にもかかわらず滞在中、ハンドルを握って案内して下さった土屋嘉右衛門さんがまた先導して下さり、佐原IC近くの鹿取神宮に参詣して無事帰路についたのであった。

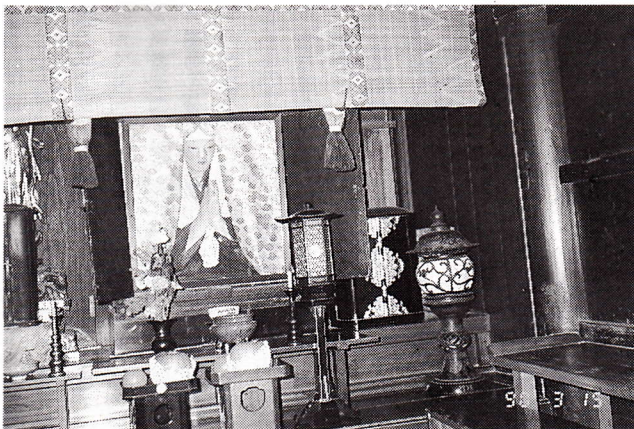
今年三月十五日、本会の一泊二日の研修旅行に参加して、その日程の中の京都大原の寂光院を訪れた。ここは何年か十年前に来たことがあるが、その時は観光シーズンだったのか、人々の洪水で狭い境内は人で溢れかえっていて静かに寿永・文治の昔を偲ぶすべもなく、その時の印象は極めて薄い。

今来て見れば山のたたずまい、川の流れば前に来た時と変わらないうであった。曲がりくねった上り坂の細い道、道の側の田、川の岸の竹藪など前の姿で点在する草葎屋根も懐しい。大原は昔ながらの大原の里と思われる。その中の寂光院はひっそりと、わびしく、つましく、しかも一種の気品をただよわせているように感じられた。

寂光院は推古天皇二年に聖徳太

子のご創建になった寺であるといわれるが、そのことよりも悲劇のヒロイン建礼門院隱栖の所として名高い。そうだったのは「平家物語」で、その平家物語（新潮日本古典集成）巻第十二第百九十九句大原御幸には寂光院のことを次のように描いている。

寂光院



寂光院随想

森 藤 幸

宅にお邪魔してお話を聴き、昼食をいただく。また常緑公筆の短冊三枚を拝見する。殊にすばらしいのは庭の景観である。また、境内で東保胤先生のお話を聞く。

でも昇殿し玉串奉奠参拝後、権禰宜東俊二郎氏は東氏の末裔として殊に親しみ深く丁寧案内してくださる。以上が主な見学箇所であるが、それにしても今回の訪問にあたって東庄町の皆さんが町をあげてのご歓待をいただき、特に郷土史研究会の皆さんの誠意溢れるお心尽くしにただただ頭のさがるばかりであった。三日目二十九日は午前七時三十分出発、早朝にもかかわらず郷土史研究会の皆さんが見送りに来て下さった。七二歳のご高齢にもかかわらず滞在中、ハンドルを握って案内して下さった土屋嘉右衛門さんがまた先導して下さり、佐原IC近くの鹿取神宮に参詣して無事帰路についたのであった。

今年三月十五日、本会の一泊二日の研修旅行に参加して、その日程の中の京都大原の寂光院を訪れた。ここは何年か十年前に来たことがあるが、その時は観光シーズンだったのか、人々の洪水で狭い境内は人で溢れかえっていて静かに寿永・文治の昔を偲ぶすべもなく、その時の印象は極めて薄い。

をや申すべき。岸の柳、露をふくみ、玉をつらぬくかとうたが、池の浮草、波にただよって、錦をさらすかとあやまたる。松にかかれる藤波の、梢の花の残れるも、山ほととぎすのひと声も、今日の御幸を待ちがほなり。深山がくれないならいなれば、青葉にまじるおそ桜、初花よりもめづらしく、水の面に散りしきて、よせ来る波も白妙なり」これで見ると限る寂光院は今も八百年昔の姿に変わりのない

ように思われる。「さる程に、うしろの山の細道より、濃き墨染の衣着たる尼二人、木の根をつたはり下りくだる。」の条を思い起せば、古びた本堂の後の山から、今にも建礼門院が、大納言典侍の局と二人で、花籠をさげて下りて来るような幻想におそわれるのである。古びた本堂、草葺の小さな庵（内部は拝観出来なかった）狭い庭園の中に尼僧姿の門院を置いて見るとき門院は悲劇の主人公である。「平家に非ざるものは人にあらず」といわれた当時全盛の平家の頭梁清盛の娘として生まれ育ったが、青春時代を宮廷にしばらく（十六歳で四歳年下の高倉帝の皇后になり、二十二歳で安徳帝を出産、二十五歳で高倉上皇に死別）その果ては西海に追われて眼前に実母を、最愛のわが子を一族を、数多の侍女達を海の藻屑と消えさせ、自らは失敗して生き残り二十九歳で出家遁世しその後は目前に見た修羅の地獄絵を瞬時にも忘れることなく、その身を攻めさいなまれながら、それでも再び死のうともせず狂いもせず生きつづけたその心情は想像も推測も仕様がな

い。八百年の昔大原にどれ程人家がある

五〇余年前、大原を訪ねたとき
文章一七〇四、のこの句がそのま

大原や蝶の出で舞う臘月

文章

大原三千院と 国風文化

園 淨 中 畑

つたろうか。何日経っても訪れる人もない孤独な毎日だったのではなかったらうか。聖徳太子のことはすっかり忘れて、ただ建礼門院の当時のことなども回想しながら下山したのであった。与謝野晶子の寂光院をよんだ歌が目についた。春ゆうべそぼ降る雨の大原や花に狐の睡る寂光院

ま大原の里を表現していることに感銘したことであった。今年三月当町文化財保護協会の研修旅行でこの地を訪れた。大原の里はすっかりさま変わりして、世の激動はこの山間の地にも容赦なく押し寄せている。しかし、三千院の参道の坂道を登り、山門に近づくとつり口にある即成院、宇治の三室戸寺の観音・勢至の外には見かけないの境地に変わってゆく。山門から境内に入ると、そこは千年の年月が凝結して、時間が停止している感じである。下村観山の画いた虹の間を過ぎ、庭下駄を歩いて両側の杉苔にはさまれた道を歩むと、そこは三千院の中心、往生極楽院である。単層入母屋造りの柿葺のこの阿弥陀堂は、まさに日本化した建築様式で、宇治の平等院、京都日野の法界寺と共に国風文化の建築を代表するものである。創建は寛和二年（九八六）といわれる。階段を上って堂内に入ると、正面に巨大な阿弥陀如来の座像が上品下生印（来迎印）を結び、伏し目の慈顔をたたえておられる。天井は舟底天井といわれているが、それは堂に比較して巨大な本尊とその光背を容れるために特にその部分を高くしたのである。



三千院

本尊の脇侍は向かって右が観音菩薩、左が勢至菩薩で、いずれも私達が座るように、きちんと膝を折ってひざまづいておられる。この姿をいつのころからか倭座というようになった。こうした座り方は極めて珍しく、京都泉涌寺の入り口にある即成院、宇治の三室戸寺の観音・勢至の外には見かけない。この姿はきわめて日本的で、親しさが感じられ、これもまた国風文化のいちじるしい例とされている。日本文化は、飛鳥時代以来、朝鮮半島や中国大陸の影響によって発展してきた。飛鳥の仏教美術は職人・水夫など一〇〇人から二五〇人、時には五〇〇人以上が渡唐して唐文化の吸収につとめた。約三〇〇年間つづいた唐も、晩年になると内乱がおき、国力が衰えはじめた。寛平六年（八九四）菅原道真が遣唐使に任ぜられたがこの年は唐滅亡（九〇七）の一三年前で、遣唐使の無意味なことを知ってこれを辞退し、さらに遣唐使の廃止を献言した。以後中国文化の流入はうすれていった。そしてそれまで摂取してい

た唐風文化を消化して、日本的な風土、生活に即したいいわゆる国風文化をうみ出した。漢字にかわってひらがなやかたかなが広く普及し、古今和歌集のほか女流文学者の出現、美術工芸、建築など日本的な文化が盛んになった。とくに末法思想の影響によって浄土教が発展し、全盛を誇る藤原貴族は、現世の栄華を来世にまで延長したいという願いから、日本の建築の阿弥堂が建てられ、さらに臨終にあたっては浄土往生を確実なものとするため、弥陀の来迎を願うようになった。こうして弥陀三尊の来迎図や彫刻が造られるようになった。三千院のこの往生極楽院と来迎三尊はこうした風潮の中から生まれたのである。脇侍の観音は蓮台を両手にささげ、その蓮台に往生人をのせて浄土に帰ろうという姿であり、勢至は合掌して、一刻も早く往生人の枕辺に到達することを念じている姿である。この脇侍の二菩薩は前かがみに眼を伏せてやさしく純粹無垢の童顔は、豊かな胸の線に合致して他に例を見ないほど崇高である。また、ひざまずいた両ひざがやや広めに開いているのは前かがみの上半身と

ともに、まさに立ち上がるとういう姿である。本尊の弥陀も心なしか今にも立ち上がるという姿に拝まれ、「静中の動」を感じる三尊である。

いずれにしても、この堂と三尊は、日本文化史上、大陸の影響を離れた国風文化の顕著な例として注目しなければならない。

春の一泊研修旅行

有代信吾

三月十五日朝七時、小雨の中を一行二十八名バスで今日明日の研修の地、京都に向かって出発した。とに習って、中国詩人三十六人を車内研修は講師河合俊次先生、今日拝観する三千院の説明とそれにちなんだお話で、殊に本堂の往生極楽院(重文)の来迎の阿弥陀三尊(重文)について詳しくお話を

お話を聞いていた。つづいて畑中浄園先生から寂光院についてのお話、壇の浦で御子、自身は義経に助けられて、大原の寂光院に入って五七歳で没するまで尼僧生活を送った健礼門院(平

藤原公任が古今集から三十六首の名歌を選んで三十六歌仙としたことに習って、中国詩人三十六人を

選んでその画像を狩野探幽に図画させ、自ら詩文を書いて居間に掲げたところからその名がある等、約三〇分間にわたって分かり易くお話をしていた。

また、吉井勇は、うつつ世の淋しさここにきはまりぬ 寂光院の苔むせる庭と詠っているとのこと。洛北大原の里は九百年の昔に思いを馳せる歴史の里である。

なせ弥陀なのかなど。また、詩仙堂については、創建者石川丈山に

つづいては、詩仙堂とは丈山が、お話を聞く。

清盛の子、高倉天皇の中宮)と平家物語の話など、詳しく興味深いお話を聞く。

寂光院 三千院を後にして寂光院に向かう。あちこちに藁葺き屋根の残るこの大原の道は、ちょうど今梅の真っ盛り。車中で畑中先生のお話の平家物語の大原御幸のくだりや、悲運の人建礼門院のことなど思いながら歩く。右手の美しい楓並木の石段を登りつめると正面に小さな本堂と一目

で見渡せる狭い庭が展ける。門を入ってすぐに歌碑の様なのがある。碑面に 沈黙はよい 木々が語ってくれるから 苔むした石が物語ってくれるから 岩清水のひびきが 耳を澄ましてくれるから みるのこえがきこえるから とあるのを手帳に控える。 この寺の本尊は約二m余の地藏菩薩である。背後の棚には無数の小さな仏様がいっぱい、六万 体地藏尊と言うのだそうだ。建礼門院像阿波内侍張子像なども 拝観。庭は平家物語に因むものが多く、簡素である。与謝野晶子の歌に ほととぎす治承寿永の御国母 三十にして経よます寺

わたりあったという一乗寺坂を上ってゆくと途中に柴折戸の門があつて詩仙堂と書いてある。

徳川の三河武士石川丈山は大坂夏の陣で軍規違反となり、武士を捨て母の死後三〇余年間ここに住んだという。丈山の作った

というこの庭園は簡素で広く見事である。詩仙の間などは車中で河合先生のお話のとおりである。

くに荘

その夜の泊まりの共済会館くに荘は久邇宮邸の跡地で、皇太后陛下がご幼少のころ、この地でお過ごしになったところで、資料室には皇室関係の什物がいっぱいある。夜の宴会は豪華で皆さん大満足。

桃山御陵、伏見桃山城

駐車場から御陵まで朝の散歩がてらに歩く。木立の間の散策は心地よく、明治陛下のご遺徳を偲びつつ大鳥居の前で記念写真を撮る。伏見桃山城は豊臣秀吉が晩年の居城として築城したものであるが、その後廢城となり、主な建物などは方々の城や寺に移された。現在の城は昭和三九年に岡山池田家の屏風絵をもと

に作られたものという。城内は資料館になっていて、明治天皇の遺品や、桃山文化を象徴する資料が各階にところ狭しと並んでいる。中でも豊臣秀吉の鎧兜、三条雅夕の画く一の谷合戦図の十六枚折屏風など圧巻である。

随心院

山科のこのあたりは昔、小野小町が住んでいたところと伝えられ、随心院はその宅地跡という。

門前の梅林は今、紅梅の真つ盛りであまりの見事さに皆さんの足は釘付けで進まない。

本堂には藤原時代の阿弥陀如来座像(重文)や金剛菩薩坐像(重文)など素晴らしい仏像が多い。そのほか小野小町に関するものが多い。

その他

勧修寺の庭園、隣の仏光院なども拝観して帰途につく。いつの研修旅行でも感じるものであるが、本物を自分の目で見て触ってみることは大きな感激を生み、素晴らしいことであると思う。また参加された会員の方が仲良く、和気藹々のうちに二日間があつたという間に過ぎて終った感じでご協力に深く感

謝する次第です。



桃山御陵前にて

小豆島行

土松 新逸

見え初めていまでも遠し真白くひかりつつ来るフェリーボートは大坂城築城の残石累々とのみ跡あらわに横たわりおり

やまつばき群れ咲く斜面に春の日の明るくひかり島静かなり

春陽うけミモザ明るく咲く島に住む人々のまなざしやさし

わが船の水脈長々とつづきつつ小豆島はも今はほろけし

東庄町をたずねて

木島 泉

対岸に灯をちりばめて大利根の流れは昏し冷えまさりある

遠つ世の跡を慕ひて来し里に赤く熟れぬる万両の実は

なぎといふ丸き木の実をてのひらに乗せてかそけき刻みつめをり

血脈の継ぎめを辿る資料庫に紙の匂ひのみちて愉しむ

ひざつきて杵き海鳴り聴きめたりわが前に咲く冬のたんばぼ

文芸欄

俳句

有代 信吾

枯れ川の底あきらかに夕茜
凧に吹かれて老ひの身の軽し
菜の花や岬の人のみな親し

日置 繁

寄生木の太樹仰げり鹿島宮
とべらの実はせて犬吠涛を觀る
花冷えの熱燗酌めり別れ宴

田中 裕

柚子浮かぶ風呂平成の手足伸ぶ
春暁のねむれぬ時計見上げけり
芽木透けて雀とまりし空青き

下広 すゑ乃

長き汽車紅葉の深き山に入る
枯山の裾に聳ゆる修道院
日暮れゆく遠嶺の雪の茜して

黒岩 きくゑ

うしろ手の袋がゆるる彼岸寺
花冷えの刑場河原の石の数
枯木立透けてからかさ連判状

横枕 千代子

梅雨空に旅の荷物の多くして
神の杜日射しかすかに木の実降る
連れ添ふてその五十年かも桜咲く

井俣 初枝

いだかれて眠りし稚児に花の雨
明かるさを他に移しつつ椿散る
花冷えの古寺の回廊足早やに

木島 泉

よもぎ摘む朝のさんぼの犬と会ひ
浜大根咲きて昨日のやうな海
桜散りやまず古井にふたをして

田中 まさを

鼻欠けし石仏混り梅三分
下枝いだき横向く菩薩黄水仙
枝垂れ梅土に並べし供養仏

短歌

矢野原 幸子

足早やに人等すぎゆく夕焼の
もてるさびしさのがるる如く

日置 智恵子

事故処理の終りし舗道きらきらと
ガラスの破片が朝の日を浴ぶ
池の面の白き飛沫のやさしくて
雨細くなり冬の声きく

石神 堯生

立退きと聞かされ帰りて「歯車」
読む世俗になじまぬ些細な抵抗
鼻唄はキジバトの声に変調す
それもよしドップリ春につかつて

小池 久江

紅椿ひとつ拾ひて端に寄す
人交差する京の石段

増田 洋子

いのち嘖く庭に花散る詩仙堂
添水のひびき風の中に聴く
ふうわりと落ちし螢が谷川を
光り放ちしままに流れる

木島 三郎

水もなき砂漠のやうな部屋隅に
球根ひとつ今朝花ひらく
幾年をここに散りまた咲きたりし
老桜の大き枝張りつよし

畑中 浄園

風わたる笹の葉群れのきらめきに
しばしみとれて立ちつくしたり
親鸞しんらんが詣りたましい鹿島宮
今ぬかづきて思う往時を

会員名簿

(順序不同)

(氏名) (役名) (電話番号)

— 剣 —

山下 運平 (顧問)	二四〇六
旗 勝美 (顧問)	二〇三一
村瀬 喜八	二二二八
山下 眞一	三四九五
河合 俊次 (理事)	二二四六
畑中 康蔵	三五〇七
畑中 定夫	二一六八
畑中 茂雄 (理事)	三七一一
小池 久江 (理事)	二五七六
国枝 貞雄	二二九三
池田 憲三	二二八二
山下ふみえ	三三二七
加藤 正恵	二一〇七
高橋 明	二四八八
日置 昭郎	二〇七二
加藤 文蔵	二八〇二
佐藤 光一	三三〇一
田中 裕 (理事)	二二〇〇
高橋 義一 (理事)	三三九二
河合 恒	二三五八
河合 芳英	二三〇四
池田智恵子	二二八二
加藤 小市	二二二九
奥村千代子	二〇二二
加藤 勝二	三三八七
武藤美恵子	三一九〇
— 大間見 —	
野田 直治 (顧問)	二一八五

野田 茂 (理事)	二二八五
村井 正蔵 (監事)	二二三三
青木 新三	二四三六
日置 繁 (理事)	二二五四
大野 紀子	二二三〇
野田 英志	二二八五
小野江選量 (理事)	二七二二
清水 一作	三〇八六
山下 直美	三九三八
池田 充彦	三〇九〇
小野江 勉	二七二五
池田 栄枝	二二八五
池田 恒純	二八七九
日置智恵子 (理事)	三〇五二
松井 直 (理事)	四〇八五
坪井 政夫	四〇九二
松井 賢雄	三九九一
古田 忠	四〇九〇
井口 一雄	四〇二〇
佐藤 秀夫	四〇〇一
藤代 順行	三〇六〇
松井 薫	三九九一
松井 と志	四〇八五
— 小間見 —	
田代 俊雄 (理事)	三九六五
田中 吾一	二五四七
島崎 英二	三〇三七
平沢 勤	三九三七
— 万場 —	
畑中 浄園 (副会長)	二四四一
畑中 真澄	二四四一
石神 堯生	二四一三
稲葉 春吉	二五〇三
黒岩きく多	二四六〇
三島 秋男 (理事)	二四六一

桑田 和子	二四一九
桑田 渥見	二四四六
桑田 信夫	二四一八
黒岩 弘巳	二四五八
井上 昌保 (理事)	二五二一
井保 初枝	二七五八
寛 明代	二五三二
— 徳永 —	
木島 泉 (副会長)	四一八二
鷺見 鈴子	二〇〇五
鷺見 おと	二一八九
直井すゝ江	三五九二
矢野原幸子 (理事)	二〇七七
鷺見 ゆき	二二八九
田中まさを (理事)	二〇六七
山内喜久子	二六一六
木島 洋女	二五九一
土松 新逸 (理事)	二七三一
遠藤 賢逸	二二二一
渡辺 明夫	二六九五
木島 三郎	三五九〇
矢野原吉夫	二一三九
— 河辺 —	
清水 幸江 (理事)	二〇一九
尾藤 元子	二一四七
横枕千代子 (理事)	二三八九
前田 孝	二一〇一
前田 鈴	三六六六
臼田とも子	二二五〇
臼田百合子	二〇四六
小池八重子	二〇四八
— 神路 —	
森 忠敬 (顧問)	二〇八三
臼田 尊徳 (理事)	三七三〇
山田 真人	二一四一

羽生 清	二二七一
— 牧 —	
滝日 準一 (理事)	二七〇五
栗飯原高照	二三六二
土松 康二	二七二九
日置 貞一	二六六二
土松 貞二	三九八〇
日置 昇	三六三六
遠藤 米吉	三六三七
遠藤 光平	三九八一
遠藤 周一	二八九〇
滝日 義一 (理事)	三〇六二
滝日 治	三四〇六
田中 勇治	三九五〇
斎藤 太門 (理事)	三九二二
日置 一朗	三六七四
松森 益吉	三九二三
加藤 一男	二八七〇
清水 定	二七一〇
日置 元衛	三四一七
粥川 溜	三三七八
本田 欽一	三一六〇
金子 徹 (理事)	三四二六
— 栗巢 —	
島崎 増造 (監事)	二二三六
増田 洋子	四〇四一
寛 政之助 (理事)	四〇三一
中山周左エ門	二七二八
武田 信康	二二八四
鷺見 豊夫	二七八八
野田 光誠	四〇二七
— 古道 —	
細川 優 (理事)	二八六一
清水 克巳	二八六二

— 名血部 —
有代 信吾 (理事) 三七九一
有代 和夫 (書記) 二二〇一

尾藤 由 三四三〇
森下 正則 三四一三
下広 茂一 三八九五
— 島 —

森藤 幸 (会長) 二七〇六
森藤 雅毅 (理事) 二六八四

須甲 甚一 二六六七
山田 長次 (理事) 三六四八
山田 昌枝 三六四八

森 数雄 二五五四
山田 良 二七九一
田中 篤 二七九二

直井 篤美 二六二二
— 白鳥町 —
玉井 秀夫 二一三三二一

— 美並村 —
清水 文枝 二四八六

◎平成二年度入会員
— 剣 —
田仲 龍子 二三六一

河合 久子 二二〇三
— 古道 —
野口紀代子 三〇八四

平成元年度事業報告

四月三日 執行部会

一八日 会計監査

役員会 前年度事業報告、決算報告、新年度事業計画

予算案等

五月一日 「文化財やまと」発行

二七日 執行部会

六月二日 県理事會 会長出席

三日 総会 記念講演 古今

伝授について 野田直治先生

七月七日 執行部会

二六日 町内文化財めぐり 牧

栗巣・口神路地内

八月七日 新能くるす桜協賛

八日 県理事會 会長出席

一〇月二七日 郷土史勉強会 浄

土真宗の郡上への伝播 畑中浄

園先生

十一月二七日 執行部会

二月一五日 役員会 一泊研修

旅行の計画

平成二年二月三日 執行部会

二月一八日 役員会 一泊研修

行の実施計画

三月一五日 研修旅行 京都大原

の三千院・寂光院、詩仙堂

一六日 桃山御陵・伏見城・随

心院・勤修寺

平成2年度大和町文化財保護協会予算書〈案〉

【収入の部】

(単位:円)

項目	予算額	前年度予算額	増減	摘要
前年度繰越金	154,753	172,711	△17,958	
会費	1,030,000	1,030,000	0	
会費	280,000	280,000	0	会員140名
特別会費	750,000	750,000	0	
補助金	50,000	50,000	0	
寄附金	1,000	1,000	0	
諸収入	4,247	3,289	958	
合計	1,240,000	1,257,000	△17,000	

平成元年度大和町文化財保護協会〈決算〉

【収入の部】

(単位:円)

項目	予算額	決算額	増減	摘要
前年度繰越金	172,711	172,711	0	
会費	1,030,000	1,004,500	△25,500	
会費	280,000	278,000	△2,000	会員139名
特別会費	750,000	726,500	△23,500	
補助金	50,000	50,000	0	
寄附金	1,000	16,000	15,000	木島泉10,000 森藤幸、小池久江各3,000
諸収入	3,289	5,703	2,414	
合計	1,257,000	1,248,914	△8,086	

【支出の部】

(単位:円)

項目	予算額	前年度予算額	増減	摘要
会議費	90,000	90,000	0	
総会費	50,000	50,000	0	
役員会費	40,000	40,000	0	
事業費	910,000	960,000	△50,000	
研修費	860,000	860,000	0	
会報発行費	50,000	100,000	△50,000	
事務局費	36,000	36,000	0	
消耗品費	5,000	5,000	0	
通信費	15,000	15,000	0	
旅費	10,000	10,000	0	
その他	6,000	6,000	0	
負担金	143,000	140,000	3,000	会員140名 本会理事3,000
予備費	61,000	31,000	30,000	
合計	1,240,000	1,257,000	△17,000	

【支出の部】

(単位:円)

項目	予算額	決算額	増減	摘要
会議費	90,000	60,505	△29,495	
総会費	50,000	11,575	△38,425	
役員会費	40,000	48,930	8,930	
事業費	960,000	871,656	△88,344	
研修費	860,000	823,656	△36,344	町内102,500 一泊721,156
会報発行費	100,000	48,000	△52,000	
事務局費	36,000	0	△36,000	
消耗品費	5,000	0	△5,000	
通信費	15,000	0	△15,000	
旅費	10,000	0	△10,000	
その他	6,000	0	△6,000	
負担金	140,000	142,000	2,000	会員139名 本会理事1名 3,000
予備費	31,000	20,000	△11,000	薪能10,000 銭別10,000
合計	1,257,000	1,094,161	△162,839	

次年度への繰越金 収入 - 支出 = 残高
1,248,914 1,094,161 154,753

平成二年度事業計画

- 四月 執行部会
- 五月 機関紙「文化財やまと」発行
- 六月 総会並びに研修会
- 七月 文化財めぐり(町内)
- 八月 薪能「くるす桜」協賛
- 九月 執行部会
- 一〇月 郷土史勉強会
- 十一月 執行部会 役員会
- 平成三年二月 執行部会 役員会
- 三月 一泊研修旅行

後記

◇会報第一五号をおとどけます。
「吾十有五而志于学」(論語) 一五歳を志学と申します。会報も志学の歳になりました。当協会も心を新たに前進したいものです。◇本号は多方面に亘る原稿を載せることができました。執筆者各位に感謝します。できればもう少し見学記を寄せていただけたらと思います。

◇「今年花散りて顔色あらたまり明年花開くもまた誰かあらん」(唐詩)といえます。お互いに自重自戒し、それぞれの分野でご活躍下さらんことを念じます。

(畑中・木島)